相模経済新聞　2021年7月10日号

宇宙生命哲学 ことはじめ

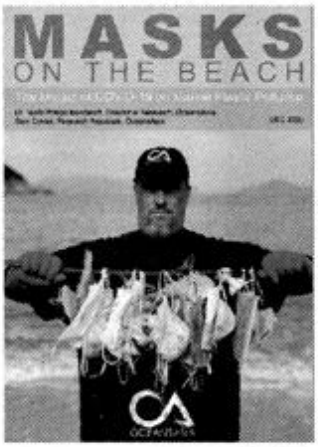
36

北里環境科学センター名誉顧問／宇宙生命哲学者
伊藤　俊洋

15億枚のマスク、海へ

かれこれ30年間、地球のゴミ拾いを行なってきた。仕事で海外へ出かけると、到着した次の日に、宿舎の周辺のゴミ拾いをする。その地域の住民になった気分になり、時差の解消のためにも有効である。

仕事の性質上、学会参加と研究発表を兼ねた旅行で、欧州（英・仏・独・伊）、北欧（スウェーデン・ノルウエー・デンマーク）、中東（イスラエル）、アフリカ（南アフリカ共和国）、南・北アメリカ大陸（アメリカ合衆国・カナダ・メキシコ・コスタリカ・ブラジル）、東南アジア（中・韓・台・カンボジア・マレーシア）などを訪問した。日本国内でも、北海道から沖縄まで、ほとんどの県を訪れる機会に恵まれた。世界中のゴミの種類はほぼ同じで、ペットボトル、空き缶、ビニールシート・袋類、手袋、雑誌、新聞紙、タバコの吸殻などである。日本と外国の大きな違いは、使い捨てマスクとビニール傘であった。日本では、30年前から季節を問わずマスクとビニール傘は路上に落ちていた。それにひきかえ、外国ではマスクも傘もほとんど路上に見かけなかった。これは、生活習慣の違いによるものと考える。日本では、戦後、生活レベルが向上するにつれて、衛生観念が極度に進み、同時に使い捨て文化が定着した。海外では、そもそもマスクをする習慣がなかった。雨に濡れることに対しても日本ほど神経質でないように思う。



オーシャンズアジア2020年12月報告書

昨年の2月頃、日本でも新型コロナの感染が始まって、マスクの生産が追いつかず、一時、マスクが貴重品になった。需要と供給のバランスが崩れた時、路上からマスクが忽然と消えた。手作りマスク、ファッショナブルマスクなど、洗たく可能なマスクが行き渡る一方、昨年の暮れあたりから使い捨てマスクが市場に出回ると、徐々に路上のマスクが増え始めた。これらのマスクは、どうなるのだろうか。

香港を拠点にする海洋保護団体オーシャンズアジアの試算によると、昨年1年間に海に流されたマスクは15億6000万枚と推定されるという。その多くはプラスチック製不織布の、いわゆる使い捨てマスクである。海岸に打ち上げられたペンギンの胃袋からマスクが発見されたり、マスクの紐が絡んだフクやカモメも発見されている。新型コロナウイルス感染症は、新たな海洋プラスチックゴミの環境問題を地球上に引き起こしている。